

意見陳述（原告 齋藤夕香）

原発から遠く離れた私たちの町にも放射性物質が降り注ぎ、不要な被ばくをさせられていることを、当時、私達は全く知りませんでした。

被ばくしていることを知らずに、普通の生活を立て直そうと頑張っていた人たちがたくさんいました。

町のお医者さんが「ここは放射線管理区域なのになあ」と言っていたことが記憶にあります。

本当は避難しなくてはいけない場所なのに、国は、被害をできるだけ少なく見せるために、年間被ばく量を大きく引き上げた上に、影響を受けやすい子供や妊婦、病気の人達にも、被ばくのリスクを伝えず、マスク、長袖、屋内退避などをすすめるだけで、避難指示を出しませんでした。

13年たっても、福島では、放射線量の測定や被ばくを減らす作業がずっと続いていて、今も毎日のように放射線量を告知しています。

そして福島でしか放射線量を伝えていません。

それでも、被ばくを少しでも避けたくて避難を決めて動いた人たちは、「不安な人、神経質な人」というレッテルをはられることになりました。

避難者は、あちこちで社会からの圧力を受けながら生きています。

気にしすぎ、考えすぎ、まだ言ってるのか、そんなに嫌なら出ていけなどと叩かれ、ネットに避難者のニュースが載れば、誹謗中傷を受け、死ねとも言われ、たくさん傷つけられてきました。

被ばくはできるだけ避けるものと私は理解しています。

国際的には、受ける線量に比例して放射線リスクは増加すると指摘されています。

事故当時は、子どもたちを被ばくから避けるために大人たちは遊具を毎日消毒したり、高圧洗浄機で土を洗い流したり、限界を感じながらも頑張っていました。

運動会は、土をなるべく触らず埃が舞わないように走るなど、とても普通ではない状況の下で開催していました。

京都での運動会で、放射線量を気にせずのびのびと組体操をしている姿を見て、福島での運動会を思い出し、涙が止まりませんでした。

同じ日本なのにどうしてと、思い出すたびに胸が苦しくなります。

放射線について学んできた方や、子どもたちをみている先生方は、私の話を積極的に聞いてくれました。

かかりつけの病院の看護師さんが泣きながら話してくれたり、子どもの権利を奪われていると訴えていた中学校の先生もいて、不安になっている人は自分だけじゃない、同じように苦しんでいる人がたくさんいるのかもしれないと思いました。

自分たちの住む場所は放射線管理区域なのに、国も東電も避難指示を出さなかったその行為は、国民に対して大きな罪を犯していると気づいたその時、裁判で絶対に訴えようと思いました。

首相官邸にもメールをしたことがあります。

学校の先生や病院で働く人たちの苦しみはなかなか伝わらないから、私が代弁しなければと思いました。

あちこちの放射線量を測定して、まわりの人にも知らせなくてはという思いで必死でしたが、友達からは私がおかしくなったと言われていました。

避難指示が出ていないのに自分だけが避難を選択することに後ろめたさもあり、私の避難は遅れました。

長女は福島にいたいと、やむなく福島に留まる親達に託して下の子ども3人と京都に避難しましたが、福島にいた家族は、安全だと思って福島にいたわけではあり

ません。

いくら線量が高くても、ずっと暮らしてきた場所から簡単に動くなどできません。

当時反抗期だった長女とは話が合わず、「もう構わないで、話しかけないで」と言われて、私から話しかけることができませんでした。成長し、時がたってから「本当はじいちゃんばあちゃんを置いていきたくなかった、本当はママたちと一緒に避難したかった」と、泣きながら言われました。

長女はずっと我慢していたのだとわかった時、思いを伝えてくれたことに少しほっとした気持ちはあっても、申し訳なかったという苦しさのほうが強かったです。

京都に避難して被ばくから逃れても、家族がバラバラになり、きょうだいや友達とも引き離してしまった自分を何度も責めました。

できることなら、娘も娘の友達も皆一緒に避難させたかったです。

避難先では支援に関わる仕事を頂き、福島県や京都府、復興庁の方ともお会いする機会がありました。

しかし、しょっちゅう担当が変わり、またいちから避難者の状況を伝えなくてはなりませんでした。

避難者がまだたくさんいる状況なのに、支援住宅を打ち切り、動けない避難者を行政が訴えたり、避難者の交流に福島県民以外は参加してはいけないというような、差別的で歪んだ対応も起きています。

コミュニティを壊す行為が復興なんでしょうか。

帰還を加速させるほうにばかり税金を使い、避難者を切り捨てる、避難者いじめのように感じます。

避難して離婚したり、縁が切れた人たちもたくさんいます。

避難しようがしまいが、同じ被害を受けたことを共有できていたらと何度も思いますが、線引きされたり離れたりしたらなかなか取り戻すことはできません。

今年の春に私は福島に戻りました。

やっぱり被ばくや放射線という言葉は言えません。

庭、埃や風、食べ物…当たり前にも目の前にあるものに神経を使うたびに辛くなり、本音を押し殺している自分がいます。

もう考えたくない、忘れたいという人の心理や本能を、国の方々はよくご存知なのでは、裏切られた人間は簡単には忘れることはありません。

家族がバラバラになったこと、大切な縁が切れてしまったこと、精神的な負担、社会からの圧力、差別的な対応、誹謗中傷、そのどれも、国が被ばく量を引き上げ、被害を矮小化したことが引き金となり、その影響が今も続いていると思っています。

あの時避難指示を出してくれていたらと何度も思っています。

地震も原発も多い小さなこの国でまた原発事故が起きた時、あの時と同じように避難指示を出さず不要な被ばくを国民にさせるおつもりでしょうか？これは明らかに国民に対しての人権無視、人権侵害です。

2022年に国連から来日した国内避難民人権担当のダマリー特別報告者は、「日本国民としての権利権限を同じく有し、避難が強制か自主的かで区別して支援する実践は無くす必要がある。」と述べています。

被ばくに対する不安は、福島県民だけではありません。

県境を越えて放射性物質は広がったのです。

被ばくを恐れて避難を選んだ人の声を、耳を傾けてしっかり聞いてください。

そして、国民をこれ以上騙さないでほしい。

同じ過ちを繰り返さないでほしいです。

これまでの原発賠償訴訟で出た判決内容に、私はあの時の事故を思い出しながら、強い憤りを感じずにはられませんでした。

なにも知らない人々を被ばくさせておきながら、なぜ、国は責任を認めないので

しょうか。

緊急事態宣言や避難指示を出してきたのは、東電だけで判断してきたものではなかったはずです。

そしてなにより、日本に原発を誘致したのは紛れもない、国です。

原発が爆発したらなにが起きるのか、よくご存知だったはずです。

国民に絶対安全だと言って安心させ、自然豊かな田舎の町に原発をいくつも作り、そして事故が起きたら、こんな事故が起きるとは思っていなかった、防げなかった、だから国に責任はない、などという答えは、国民への非人道的な裏切り行為です。

人間だけではなく、たくさんの動物達も犠牲になったのです。

裁判官。

原発事故が想定内か想定外かなど、正直何も知らされていない人間からしたら関係ありません。

ただただ被ばくを強要されてきたのです。

私たち国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利があります。

避難者は、健康でいたい、命を守りたいから避難したのです。

国と東電は、もう同じ繰り返しはしないでください、しっかり国民を守るという謝罪と約束をしてください。

国民にこれ以上要らない被ばくをさせないでください。

線引きなく誰もが安心して避難できなければ、原発など動かしていいはずがないです。

どうか、私たちの未来の命を守るために、正しい判決を望みます。